

日本酒の横綱、灘五郷の巻き返し。

知人を案内し、灘五郷を巡った。酒蔵の傍らにある直営店に入り、試飲のカウンターを見て驚く。

全席、欧米からの若い外国人観光客である。女性も交じる。日本酒の味が気に入ったのだろう。飛び交う言葉が明るくはずんでいた。

都道府県別にみて、兵庫県の日本酒生産量は日本一だ。神戸から阪神間にかけて蔵元が集まる灘五郷はその象徴である。しかし全国的な若者の日本酒離れもあって、酒づくりの横綱は長く向かい風にあえいできた。

打開策の一つは海外での日本酒ブームだ。灘五郷を訪れる外国人観光客も増え、白鶴酒造資料館を訪れる年間約14万人のうち4割がアジア圏などの外国人と聞いた。

酒の文化に国境はない。試飲の若者たちを見ればそう実感する。味にほれれば、つくり方にも興味がわく。

酒づくり道具を外国人がじっくり見る光景は珍しくないし、新酒ができたことを告げる杉玉にも関心が集まる。

酒蔵にある神棚も考えようでは立派な観光資源だ。素顔の日本の文化、風習が訪日客の心をつかんでいる。

メーカーは力が入る。直営店の入り口には、多様な言語で書かれたパンフレットが並んでいた。店内を見れば「Tax Free」（免税）の大きな表示が目に入る。

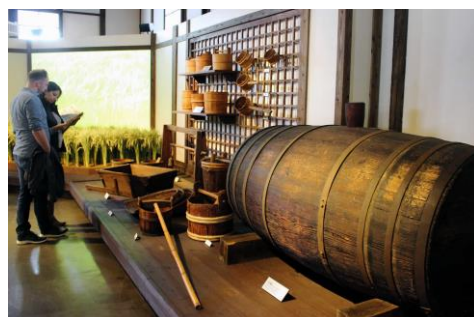
自治体も意欲を見せる。「清酒発祥の地」を掲げる伊丹市が声を挙げ、灘五郷の神戸市、西宮市、菰（こも）樽生産量日本一の尼崎市、酒造家と縁の深い芦屋市の5市が、日本酒文化をテーマに日本遺産認定を目指そうとしている。

酒米の王・山田錦の最大産地である県西部・播磨地域でも外国人観光客誘致の機運が盛り上がってきた。大学も動く。

神戸大学と灘五郷の酒造組合が今秋、全7回の日本酒学入門講座を開く。これもおもしろい。

杯から立ち上る香りは人だけでなく、地域も元気にする。

神戸新聞社 特別編集委員兼論説顧問 林 芳樹



資料館にある酒づくりの古い道具にも足が止まる